

通訳・外交官としての宣教師メルメ・カション

——日伊条約の交渉を事例に

ル・ルー ブレンダン

French missionary Mermet-Cachon as an interpreter and diplomat
—Through his collaboration to the Japanese-Italian treaty negotiations

LE ROUX Brendan

The so-called «Ansei Five-Power Treaties» signed in 1858 made possible for US, Russian, Dutch, English and French nationals to live in the open ports of Japan. As a consequence, missionaries also began to arrive there, and among them were the two first French missionaries to live in Mainland Japan, father Girard in Edo and Kanagawa (arrived 6 Sept. 1859) and father Mermet in Hakodate (arrived 25 Nov. 1859).

Born in Sept. 1828, Mermet entered the seminary of the Paris Foreign Missions in 1852, and after having been ordained, he left for Japan on 25 Aug. 1854. From February 1855, he stayed in the Ryūkyū Islands in order to learn Japanese, but he had to go back to Hong-Kong in October 1856. Nevertheless, when he arrived in Hakodate, Mermet, who had also taken part as Baron Gros' interpreter in the negotiations for the first Japanese-French treaty in October 1858, already had a deep knowledge of Japan and of the Japanese language. He then stayed in Hakodate until the summer of 1863, but as the propagation of Christianity was still forbidden in Japan from the spring of 1864, he had to engage into many other activities.

After having returned to France for a short time, Mermet was engaged as interpreter by Roches, the second French Minister in Japan from the spring 1864. During the two years and a half that he served at the French legation, he again took part in a wide range of activities. The one that we wish to talk about in this article is the role that Mermet played during the negotiations for the first Italian-Japanese treaty, which took place between July and September 1866.

はじめに

1858年に締結された条約（いわゆる「安政五ヶ国条約」）によって、鎖国という国是を守り続けてきた日本は少しずつ西洋列強に開かれ、先ず五つの港¹⁾が開港地となった。そこに、条約によって信仰の自由が認められた西洋人の信者のために²⁾、聖職者として宣教師も現れ始めた。彼らは、日本人に未だ認められていない信仰の自由の実現を期待しながら、キリスト教の布教を行う機会を待っていたのである。

日本におけるカトリック派の布教の独占権を握っていたのは、1663年に創設されたパリ外国宣教会（Missions Étrangères de Paris、略MEP）である³⁾。19世紀半ばにアジアでの本拠地をポルトガル領のマカオから、イギリス領の香港に移動させ、日本や朝鮮、満州へ派遣された宣教師は全員香港に滞在してからその使命を果たしに赴いたのである。

その流れで、1844年に初めてパリ外国宣教会の宣教師が沖縄に派遣された。フォルカード（Théodore-Augustin Forcade（1816-1885））神父である。琉球王国が日本の支配下にあったという考えに基づいて、沖縄におい

-
- 1) それまでオランダ人と中国人のみに開かれていた長崎、神奈川（後に横浜に変更）、箱館（現函館）、兵庫（後に神戸に変更）、新潟。条約締結後すぐ開港したのは、神奈川（横浜）、長崎と箱館である。江戸と大阪の開市も定められたが、すぐには実現しなかった。
 - 2) 日米条約第8条：「日本に在る亜米利加人自ら其国の宗法念し礼拝堂を居留場の内に置も障りなし並に其建物を破壊し亜米利加人宗法を自ら念するを妨る事なし〔略〕」
／日蘭条約第7条：「日本に在る阿蘭陀人自ら其国の宗法を念し礼拝堂を居留地の内に置は障りなし並に其建物を破壊し阿蘭陀人宗法を自ら念するを妨る事なし〔略〕」
／日魯条約第7条：「日本に一時或ハ連綿在留の魯西亜人家眷を携る事を免し且自ら其宗旨を念し宗法を修する事を得へし長崎に於て踏絵の仕来ハ既に廃せり」
／日英条約第9条：「在留の貌利太泥亜人自ら其国の宗旨を念し拜所を居留の場所に営む事障なし」
／日仏条約第4条：「日本に在る仏蘭西人自国の宗旨を勝手に信仰致し其居留の場所へ宮社を建るも妨なし日本に於て踏絵の仕来は既に廃せり」（『舊條約彙纂』（外務省条約局、1930-1936）、下線は筆者によるもの。）
 - 3) 1831年に、ローマ教皇グレゴリウス16世が日本と朝鮮へのカトリック派の布教の独占権をパリ外国宣教会に与えた。

て日本語を勉強しながら日本本土に渡る機会を待つのは当初の計画であった。しかし幕府の厳しい監視のもと、その計画が失敗に終わり、フォルカード神父が香港に戻らざるを得なかった。それにもかかわらず、パリ外国宣教会は琉球ルートを通じて日本に入ろうという考えにこだわり続き、その後も日仏条約が1858年に締結されるまで、何度か宣教師を沖縄に滞在させた。それらのうちの一人が、後に日本とフランスの関係の曙において重要な役割を果たしたメルメ・カション（Eugène Emmanuel Mermet-Cachon⁴⁾, 1829-1889）であった。

I. メルメ・カションの略歴

メルメ・カションは、1829年9月にフランス東部ジュラ山脈の小さな村落ラ・ペース（La Pesse）の農家に生まれた。少年時代について詳細が分からないが、宗教的な教育を受けたのではないかと考えられる。というのは、1852年にパリ外国宣教会の神学校に入学してからわずか2年で、1854年6月11日に司祭に叙階されたので、宣教会に入る前から何らかの形で宗教教育を受けていたと推測できる。

そして神父になったメルメは、その年の8



メルメ肖像
（クリスチャン・ポラック氏蔵）

4) メルメの苗字について色々と議論されてきたが、出生時の姓は Mermet-Cachon だったようである（西堀昭「メルメ・ド・カション（1828-?）と日本のフランス語教育（資料）」を参照）。しかし東アジアにおいて活動を展開したメルメは、フランスの貴族風の苗字を名乗り始め、少なくとも1859年11月からメルメ・ド・カション（Mermet de Cachon）という苗字を使っている（パリ外国宣教会資料室所蔵、1859年11月18日付、エームリ（Aymeri、上海におけるラザール修道会館長）神父宛の書簡）。その上、パリにあるメルメの墓地の墓石にも「メルメ・ド・カション」と刻まれている。

月25日に使命の地である日本へと出発した。当時は長くて危険な度であった極東への道は、南仏の第一の港マルセイユ（Marseille）に始まり、地中海を経てエジプトのスエズ（運河がまだ開設されていなかったが）へと続き、インド洋を渡りシンガポール、そして香港に終わった。アジアへ派遣された宣教師は皆一時的に香港にとどまり、そこで色々な情報を収集し勉強しながら更なる指示を待っていた。メルメに出された指示は、琉球に渡り、日本語を学習するということであった。

その結果、1855年2月に、同じパリ外国宣教会所属の二人の宣教師フュレ神父（Louis Théodore Furet（1816-1900））とジラル神父（Prudence Séraphin Barthélémy Girard（1820-1867））とともに琉球の那覇に到着した。しかし、以前沖縄に滞在した宣教師と同様に、幕府の厳しい監視のせいで、宣教活動がほぼできないままだった⁵⁾。そのかわり、日本語（とある程度琉球語）の勉強に取り組んだメルメは、同僚のフュレ神父の証言によれば割りと早い上達を見せたようである。しかし健康が優れていないメルメは、沖縄の気候になかなか慣れることができず、1856年10月に香港に戻らざるを得なかった。そこでも、日本から流れてきた漂流民のもとで、日本語を学び続けたという。

その日本語能力が正式に認められたようで、メルメがフランスと中国そして日本との条約交渉のために東アジアまでやってきたフランス全権グロ男爵（Jean-Baptiste Louis, Baron Gros（1793-1870））の通訳として採用されたのである。1858年10月9日に締結された日仏条約の交渉は、他の条約と違って、オランダ語ではなく直接に日本語で行われたのも、メルメの存在のおかげであると言える⁶⁾。

そして、メルメの協力で締結された条約によって開かれた三つの港に、

5) 一人の召使いを改宗させることができたという記述が宣教師の書簡において見られるが、その人が数日後現れなくなったという。

6) 拙稿「『安政五カ国条約』を問うて」（大石学編『一九世紀の政権交代と社会変動－社会・外交・国家』東京堂出版、2009）

パリ外国宣教会の宣教師が赴くこととなった。ジラル神父は日本における宣教団のリーダー的な存在として第1次フランス領事デュシェーン・ド・ベルクール（Gustave Duchesne, Prince de Bellecourt, 1817-1881）の通訳として、神奈川・横浜・江戸に滞在することに決めた。長崎にはしばらく MEP の宣教師がいなかったが、フュレ神父が1863年にその地を担当することとなった。メルメに関しては、健康が相変わらずすぐれていないにもかかわらず、当時蝦夷地の第一都市として発展していた箱館へと向かって、1859年11月25日にそこに到着した。

箱館において宣教活動が禁じられていたメルメはフランス語の学校を開き、栗本鋤雲（文政5年（1822）－明治30年（1897））などの幕吏にフランス語を教えて日本語も教わり、他の列強の外交官・商人とのネットワークを築き、アイヌ村落を観察し、日英仏辞典に携わり、様々な活動を行うことで幕府の信頼も受けたようである⁷⁾。

しかし、未だに明らかにされていない何らかの理由によって、メルメは急に1863年6月頃帰国することにした。「家族の事情」という口実をパリ外国宣教会に伝えたが、詳細が分からない。とにかく、もう一度極東とヨーロッパを結ぶ長い度に出て、同年8月の始めにマルセイユに戻っていた。フランスでの滞在が11月半ばまでで短い期間だったが、その間メルメはまた様々な活動を繰り広げた。ここで特に記述に値するのは、アイヌに関するパンフレットの刊行、そして日英仏辞典の刊行へのやり取りを外務省との間で行ったということであろう。

結局自分の使命が待っていたかのように、メルメは再び香港を通じて1864年4月末日本に戻っていた。香港において日本の第2回遣欧使節（横浜鎖港談判使節、池田使節とも）に面会し、箱館で自分の生徒であった通訳の塩田三郎とも話せたようである。日本に戻ったメルメは、1864年5月初頭

7) 拙稿「一人の宣教師の運命－メルメ・カションと日本（その一）」（『仏蘭西学研究』第36号、2010年7月）

に第2次駐日フランス公使ロッシュ（Michel Jules Marie Léon Roches（1809-1900））によってフランス公使館付通訳・書記官として採用され、そこから後述するように宣教師としてではなく、むしろ外交官としての道を歩むことになった⁸⁾。ロッシュの側近としてのメルメの活動は先行研究において明らかにされている点が多く見られる。例えば、幕府が西洋風の陸軍を作り上げようとした際に士官養成機関として必要とされた横浜のフランス語学校の創設にメルメが関わり、事実上の校長を務めた。また、横須賀製鉄所の設立交渉にも参加し、栗本鋤雲や小栗上野介との信頼関係が役に立ったと言える。ただし、先行研究に明らかにされてこなかった点も残っており、本論文のテーマである日伊条約の交渉（1866年7～9月）に参加したメルメの役割はその一つなのである。

様々な活動を繰り広げたメルメは、1866年10月に完全に帰国してしまったが、その後の活動については、史料不足のためまだ詳細が分からない。ただし、最近明らかになったのは、メルメが長い間信じられてきたように1870年頃ニースで亡くなった⁹⁾のではなく、1889年3月14日に南仏のカヌ（Cannes）にて死亡したということぐらいであるが、パリにある彼の墓地の墓石には「元フランス領事」¹⁰⁾と刻まれているのが不思議な記述で未だに説明されていないものである。

8) メルメのパリ外国宣教会脱会の問題について、議論の余地がある（拙稿「一人の宣教師の運命—メルメ・カションと日本（その二）」（『仏蘭西学研究』第37号、2011年刊行予定）。

9) 例えば、パリ外国宣教会のホームページに2009年11月に最後に確認した時はそう記されていた。（<http://www.mepasie.org/rubriques/haut/archives-mep>）それ以来、工事中となっている。

10) 墓石にこう刻まれている：«EUG. EMM. Mermet de Cachon / Ancien consul de France / Officier de la Légion d'Honneur / Décédé à Cannes (Alp. M.) le 14 Mars 1889 dans sa 61^e année»（「ウージェーヌ エマニュエール メルメ・ド・カション／元フランス領事／レジオン・ドヌール勲章オフィシエ（将校、4等）／カンヌ（アルプ＝マリティーム県）にて1889年3月14日に死亡（享年61歳）」－筆者和訳）

II. 多面的な活動家としてのメルメ・カション——先行研究を踏まえて

以上のような人生を送ったメルメは、幕末期の日仏関係において重要な役割を果たしたことで、多少ではあるが日本では研究されてきた人物である。その中に、特にメルメが第2次フランス公使ロッシュの側近として活動したことがかなり知られており、それによってメルメは「日仏交流の父」の一人として位置づけられている¹¹⁾。その評価は主に、前述した1865年4月に幕府によって設立された横浜仏語伝習所の事実上の校長を務めたこと、1866年に建設された横須賀造船所の創立に関する交渉において小栗上野介とともに関わったことによるものである。また、日本語ができなかったロッシュの通訳、情報収集役としての役割もフランスと幕府との関係を強化するにあたって重要であったに違いない。

更に、富田仁¹²⁾は、メルメの著作が「熟達した文章で綴られ、文学的芳香が感じられる」と、メルメを「文化人ないし知識人」として高く評価しており、メルメ自身も自分のことを「文化人」と自称している評価に一致する。しかし、今まで日本でもフランスでも第一史料に基づいたメルメに関する研究がなく、主な資料としてマルナスというパリ外国宣教会の宣教師が後年著した『日本キリスト教復活史』(Francisque Marnas, *La «Religion de Jésus» (Jaso ja kyô) ressuscitée au Japon dans la seconde moitié du XIXe siècle*、パリ、1896¹³⁾)に編集・修正された書簡が使用されてきたのである。ところが、今回筆者がその利用が許されたメルメ自筆の書簡¹⁴⁾において、フランス語の文法や綴りの間違いが非常に多く見られ、先行研究で評価されているほどメルメが「文化人」であったという評価に

11) 富田仁『メルメ・カション—幕末フランス怪僧伝』（有隣新書、昭和55年）、西堀昭「メルメ・ド・カション（1828—？）と日本のフランス語教育」（『千葉商科大学紀要』第14巻、昭和51年）。

12) 富田仁（同上）。

13) 久野桂一郎訳、みすず書房（東京）、1985

14) パリ外国宣教会資料室所蔵のもの。

対して疑問を抱いているのを否めない。

また、メルメの多面的な活動の中でほとんど研究されてこなかった面も残っている。メルメが箱館に滞在していた時期にアイヌの村落を観察する許可を得て、アイヌの文化、宗教、歴史等に関するパンフレットを1863年に刊行した¹⁵⁾にもかかわらず、それに対する研究がなされていない。更に、同時期に幕府の諸役人を一覧表のように紹介する「日本のヒエラルヒーに関する研究¹⁶⁾」という論文も執筆したが、それもまた研究どころか、紹介すらされてこなかったものである。執筆活動を続けたメルメは、新聞記者でもあり、少なくとも日本滞在の前半（一時帰国する前）に *L'Univers*（「宇宙」）や *La Patrie*（「祖国」）というフランスの新聞に日本に関する記事をいくつか提供したのである。

日本の文化をフランスの読者に伝えようとしたメルメは、日本の言語にも興味を持ち、琉球に滞在した時期から辞典を編集しようと努力した。1866年に刊行された日英仏辞典がその成果であるが、実際は一時帰国の1863年の夏秋に、メルメが外務省にその出版費用を依頼した結果、2万フランと見積もられた出版費用の半分（5000フランを二回）を1863年12月と1864年2月に外務省から頂くことになった¹⁷⁾。しかしこの日英仏辞典の刊行は、メルメと日本語学者のパジエス（Léon Pagès（1814-1886））との対立など、様々なトラブルの影響で半分にとどまらざるを得なかった。これもまた研究されてこなかったテーマである。

しかし宣教師であったメルメが歴史にその名を残したのは、言うまでもなくフランス公使ロッシュの側近・通訳として活躍したからである。つまり、グロ男爵が率いるフランス使節の通訳から選ばれてから密接に結んで

15) 筆者邦訳中（日本語確認段階）。

16) «Étude sur la hiérarchie japonaise」、パリ外国宣教会資料室所蔵。未刊。筆者邦訳中（ほぼ完了）。

17) パリ外国宣教会資料室所蔵、1863年11月3日付外務省よりメルメ宛の書簡、1863年12月9日付外務省よりルセイユ神父（MEP会長の一人）宛の書簡、1864年2月17日付外務省よりルセイユ神父宛の書簡。

いた外交界との関係によるものなのである。メルメが通訳官、外交官として活躍したからこそ幕末の日仏関係だけではなく日本の対外関係に影響力を及ぼしたと言えよう。ところが、メルメがイタリア使節の通訳として1866年に締結された日伊条約の交渉にも関わったことがあるにもかかわらず、それについては先行研究において一言も述べられていないのが不思議である。唯一確認できる記述は、島崎藤村の『夜明け前』に関する研究を通じて栗本鋤雲とメルメの關係に偶然に気付いた赤尾利弘¹⁸⁾であるが、赤尾はイタリア使節団長アルミニヨン（Vittorio F. Arminjon (1830-1897)）が著した回想録『伊国使節幕末日本記』¹⁹⁾を基に、メルメが出て来る箇所を列挙する作業にとどまっている。

本論文では、以上の先行研究を踏まえ、イタリア使節団長アルミニヨンの回想録の原版のイタリア語版と日本側の資料を基に、メルメとイタリア使節の関係を整理してみたい。

III. 「宣教師」としてのメルメ・カション？

メルメとイタリア使節との関係を理解する上で、先ず一つの問題に触れなければならない。それは、日本においてその布教が厳しく禁じられていたカトリック派の宣教師が幕府との交渉に正式な立場に立って参加できたのか、ということである。

1866年6月にイタリア使節が来日した時に、メルメがフランス公使館付

18) 赤尾利弘「『夜明け前』に登場する二人の異人—メルメ・カションとケズウイック」(『亜細亜大学教養部紀要』第43号、1991年)

19) 原題は *Il Giappone e il viaggio della corvetta Magenta nel 1866* (Genova, 1869)。邦訳は田沼利男訳（昭和18年、三学書房）、もっと新しい翻訳書には、大久保昭男訳『イタリア使節の幕末見聞記』（新人物往来社、1987）と同訳『イタリア使節の幕末見聞記』（講談社学術文庫、2000）があるが、まだ確認していないので、この論文では古い日本語版に頼ることとしたい。しかし誤訳が結構見られるので、筆者が独自の和訳を使用したい。

通訳・書記官として務めていたのは確実である。しかし、もとの身分である宣教師のままであったのかという点について、議論の余地が残っている。先行研究の富田仁を見てみると、メルメは「今度はパリ外国宣教会の宣教師ではなくて、フランス政府の対日外交政策を円滑に行うための駐日フランス公使の通弁官として来日し」²⁰⁾、「パリ外国宣教会本部の資料でもミッションを離れたことが記されているが、その年月日はあきらかにされていない」²¹⁾という記述が見られる。つまり、時期が定かではないにしても、メルメは1864年の春にロッシュに採用される前に既に宣教師ではなくなっていたという説を唱えているのである。それに対して、もう一つの主な先行研究である西堀昭²²⁾はロッシュ公使の書簡を引用し、その中にメルメが「メルメ神父」(«Mr l'abbé Mermet»)と4回のうちに3回呼ばれていることから、ロッシュにとってまだ宣教師、少なくとも聖職者であったという印象が与えられる。

ところが、メルメ自筆書簡において、身分についてどう記されているのだろうか。1864年4月26日付の書簡²³⁾において、「誰かが私を宣教会から追い出す口実を探そうとしているように信じ始めました。〔略〕私の所有している全てのもの、そして私自身も、日本宣教団のものです。それは私が宣教会から追い払われる日まで。」²⁴⁾という記述がある。つまり、ここでは自分が宣教師であると強く自意識している。また、1864年5月26日付の書簡²⁵⁾において、「ムニク氏〔もう一人の宣教師〕は〔略〕、私が恥ずべき方法で隠密に宣教団長の地位をしばらくの間もらったという理由で宣教会から追

20) 富田仁、103頁。

21) 同上、144頁。

22) 西堀昭（前掲論文）。

23) パリ外国宣教会資料室所蔵。ルセイユ神父宛、横浜より。

24) «Je commence à croire que l'on est à la recherche d'un prétexte pour m'expulser de la société. (...) tout ce que j'ai appartient a (sic) la mission du Japon comme je lui appartiens tout entier jusqu'au jour ou (sic) l'on m'en chassera.» (報告者邦訳)

25) パリ外国宣教会資料室所蔵。ルセイユ神父宛、横浜より。

い払われていると皆に伝えています。』²⁶⁾ という記述から、他の宣教師に宣教会から追い払われそうな状態が危うくなっていることが分かる。更に、1864年9月19日付の書簡²⁷⁾において、「私の可哀想な日本の宣教地を諦めざるを得ないことが実際に分かってきました。私にとって祖国や家族よりも大事だったこの宣教地。諦めざるを得ないのは、非聖職者として仕えることを選ばない限りではありますが。しかしそれは不可能としか思えません。』²⁸⁾ という記述からは、この時点で、パリ外国宣教会会長のルセイユ神父からの7月14日付の書簡を受けて、宣教団から外されたという事実を受け取った様子が窺える。

つまり、先行研究で言われてきたのと違い、メルメは日本に戻ってきた時点でまだパリ外国宣教会の宣教師であったが、様々な理由によって1864年7月頃追い出されてしまったということが明らかになったと言える。

さて、本論文のテーマであるイタリア使節との関係に関連して、イタリア使節の構成員から見たメルメはどんな人だったのだろうか。使節団長アルミニオンは、メルメと同時期に来日し横浜と江戸を担当していたジラルという宣教師を「ジラル神父」（«padre Girard»²⁹⁾）と称しているのに対して、メルメのことを必ず「ド・カション氏」（«il sig (nor) (M.) de Cachon»）と記しているので、宣教師・聖職者として意識していないことが窺えるのである。ただし、アルミニオンにとってメルメはロッシュの通訳だったので、アルミニオンの判断がその肩書きに基づいて行われたのかも知れない。

26) «Monsieur Mounicou (…) dit à tout le monde que je suis chassé de la société pour avoir par des moyens honteux subrepticement obtenu ad tempus le superiorat (sic) de la mission.»

27) パリ外国宣教会資料室所蔵。ルセイユ神父宛、横浜より。

28) «Je vois en effet que je dois me résigner à renoncer à ma pauvre mission du Japon. Cette mission qui était pour moi plus que patrie et famille. Je dois y renoncer, à moins que je ne veuille la servir comme un simple laïque, rôle qui ne me paraît (sic) guère possible.»

29) Arminjon、235頁。

IV. イタリア使節へのメルメ・カシヨンの協力

1866年7月に、イタリア使節は網代の温泉に休暇をとっていたフランス公使ロッシュに接近し、アルミニヨンはその初対面についてこう述べている。

史料I

«Quella sera pranzai col Ministro di Francia, e quindi ci ponemmo a discorrere della mia missione. Io pregai il signor Roches di appoggiarmi della sua influenza e di concedermi un segretario interprete della legazione francese per trattare co' giapponesi. (...) il sig. Roches promise lealmente il suo aiuto e mi propose per segretario interprete il sig. Mermet de Cachon, francese chiarissimo stabilito da molto tempo al Giappone, il quale aveva eseguito lodevolmente le suddette funzioni col barone Gros nel 1858. Il sig. Mermet de Cachon era amico de' giapponesi; egli conosceva tutti i Governatori degli affare esteri e i membri del grande e del secondo Consiglio. Io aveva inteso parlare da lui a Parigi da persone notabilissime, e non esitai quindi ad accettar la proposta del sig. Roches. Pregai quel Ministro di comunicare al signor M. de Cachon il mio desiderio di averlo al servizio dell'Italia.³⁰⁾ »

和訳：

「その晩、私はフランス公使と一緒に夕食を取り、そして私たちは私の使命について語り合い始めた。私はロッシュ氏がその影響力で私を支持してくれることと、そして日本人と交渉するためにフランス公使館の書記兼通訳官を貸してくれることを依頼した。〔略〕ロッシュ氏は誠実に援助を約束してくれた。そして書記兼通訳官としてメルメ・ド・カシヨン氏を勧めて

30) Arminjon、232-233頁。

くれた。彼は長い間日本に滞在している著名なフランス人で、1858年にグロ男爵のもとで同上の役割を立派に果たした人である。メルメ・ド・カション氏は日本人の友達で、全ての外国奉行、そして大評議会〔＝老中〕と第2評議会〔＝若年寄？〕の全ての会員をも知っていた。私はパリで彼の話を非常に有力な人たちから聞いていたので、ロッシュ氏の提言を受諾するのにためらわなかったのである。ド・カション氏にイタリアのために働いて欲しいということを同氏に伝えるようにロッシュ公使に依頼した。³¹⁾」

以上の史料から、アルミニヨンがロッシュの援助を求めたところ、ロッシュは自ら自分の書記兼通訳官であるメルメを提供してあげることにしたこと、そしてアルミニヨンはメルメが日本に長く滞在した間に外国奉行や他の幕府の役人との密接な関係を結ぶことができたことが窺える。更に、アルミニヨンがメルメの高い評判をパリに滞在した時に既に耳にしていたという記述もフランスにおけるメルメのイメージ・認識を考えると興味深いものである。その結果、アルミニヨンはロッシュの提案にすぐ手を打ったのである。

ところで、そもそもイタリア使節はどうして日本においてフランスの援助を求めたのかという疑問が残るので、それについて説明を加えよう。アルミニヨン自身はその理由について特に述べてはいないが、横浜に到着した時に、在日西洋外交官のリーダー的存在であったロッシュもイギリス公使のパークス（Sir Harry Smith Parkes (1828-1885)）もいない状況だった。そこで、パークスが出掛けていた長崎より、ロッシュが滞在していた網代の方が近くて便利だったという単純な理由が考えられるが、もう一つのもっと重要な理由として、ナポレオン三世のイタリア統一への深い関わりが挙げられる。

サルデーニャ王ヴィットーリオ・エマヌエーレ2世の首相カヴール

31) 筆者和訳。

(Camillo Paolo Filippo Giulio Benso, Conte di Cavour (1810-1861)) がプロンビエールの密約 (Accordi di Plombières) によってフランス皇帝ナポレオン 3 世の援軍を要請し、イタリア統一に対する最大の難問でしかもナポレオン 3 世の宿敵だったオーストリア帝国をイタリアから追放することができた。1861年にはローマ教皇領とヴェネツィアを除き、イタリアは統一され、イタリア王国が成立し、国王ヴィットーリオ・エマヌエーレはイタリア国王として1861年3月に即位し、首都をフィレンツェに置いた。そのような仏伊関係だったので、若きイタリア王国が日本においてフランス帝国の援助を求めたのは当然のことだと言える。

そして、援助を求められたメルメは、7月8日にフランスのキエン・シヤン号に乗って、病気で横浜に残っていたイタリア参議院議員デ・フィリップ (Filippo De Filippi (1814-1867)) と一緒に網代に到着した³²⁾。アルミニヨンの依頼を快諾してから江戸に戻ったが、イタリア使節の到着とフランスによる援助³³⁾ という情報を直接に口頭で老中に伝えることを約束した³⁴⁾。日伊条約交渉に関する幕府とイタリア使節とのやり取りの書簡等を収録する『続通信全覧』第152巻 (「伊太利条約一件 一」) では、「丙寅六月朔日」(1866年7月12日) 以前の書簡が存在しないことから、メルメは確かに口頭で老中にそれらの情報を伝えたことが推測できるのである。しかも同じ日付の、外国奉行柴田日向守 (文政6年 (1823) - 明治10年 (1877)) よりメルメ宛の以下の書簡が載っている。

32) メルメがパリ外国宣教会本部に宛てた書簡の中に、イタリア使節との関係が全く述べられていないのは非常に残念なことである。

33) 『続通信全覧』(外務省編纂、通信全覧編集委員会編、東京、雄松堂出版、1983-1988) 第152巻、78～80頁に、ロッシュが「江戸に在る大君之ミニストル御老中各台下」に宛てた書簡の和文が載っており、幕府がなぜイタリアと条約を結ぶべきかを説明している内容のものである。

34) Arminjon、238頁。

史料Ⅱ

丙寅六月朔日

以手紙致啓上候昨日面晤之砌意太利亚国使節より
書翰差出次第明日ニも尋問いたし候□り御咄申置
候處腫物痛み強く歩行罷儀いたし候間其地出張日
限□三日延引可相成ニ付其段可然御会置有之度候
謹言

慶応二年丙寅六月朔日

柴田日向守

和春様

追啓意太利亚使節出府いたし候□□不都合ニ付貴
君御取計を以出府無之様いたし度此段御頼申候以
上³⁵⁾

つまり、メルメ（以上の史料には「^{カシオン}和春」と記されている）は慶応2年5月晦日（1866年7月11日）に外国奉行柴田日向守に面会し、アルミニオンからの伝言を伝えたということが読み取れる。柴田は病気のためイタリア使節に面会しに行けず、イタリア使節がしばらく待つようにとメルメに伝えていることも分かる。そしてメルメはその口頭の回答を持って、7月11日の夜イタリア軍艦マジェンタ号に戻り、幕府の回答をアルミニオンに伝えた。それらのことによって、メルメの役割は通訳官にとどまらず、条約交渉の過程においてイタリア使節と幕府とを結ぶ仲介人という重要な役割をも担っていたことが分かる。表1を見ると、メルメの仲介人としての役割が交渉中続くことが分かるのである。

35)『続通信全覧』第152巻、71-72頁。「□」はまだ読めていない文字を示す（以下も同様）。

V. 日伊条約締結とメルメ・カション

8月6日ようやく江戸に上陸することが許されたイタリア使節一行は、同月11日より三田小山の大神寺に止宿することになった。幕府との条約交渉は間もなく開始されたが、開始当日はメルメが現れなかったので、最初の交渉は塩田三郎を通じて進んでいった。塩田三郎（天保14年（1843）－明治22（1889））というのは、箱館においてメルメにフランス語（と英語）を習った人で、栗本鋤雲にも師事し、後に幕府の通訳官になった人物である。1863年12月にフランス軍艦ル・モンジュ号に乗って出帆した横浜鎖港談判使節団（第2回遣欧使節、池田使節団）の一員となり、1864年1月頃香港でメルメに再会していることがメルメの書簡から推測できる。この塩田三郎の協力によって行われた交渉がどのような過程で進んでいったのだろうか。以下の史料に反映されているのでそれに参考されたい。

史料Ⅲ：

«A mezzodi i tre commissari giapponesi arrivano a cavallo con i segretari ed interpreti. (...)

(...) Il sig. M. de Cachon non ha potuto venire; ma gl' interpreti giapponesi sono molto intelligenti, essi parlano l'inglese e l'olandese; Shioda conosce bene il francese e quindi possiamo intenderci e discutere tutti i testi che ci occorre esaminare pel confronto del nostro progetto cogli altri trattati. (...)

L'indomani terminammo l'esame del progetto e fu deciso che la convenzione commerciale del 25 giugno sarebbe integralmente inserita nel nostro trattato, il quale doveva scriversi in italiano, olandese e giapponese. Ma si convenne più tardi che all' olandese lingua poco conosciuta in Italia sarebbe sostituito il francese, e che quest' ultimo testo si avrebbe per il solo corretto nel caso di contestazione intorno al

valore od al senso di qualche articolo. Il trattato poi doveva essere
esecutorio il 1° gennaio 1867, aspettando le ratificazioni, le quali si
scambiarebbero al più presto che fosse possibile. Il sig. M. de Cachon
arrivò molto opportunamente il mattino del 13 per aiutarci a
determinare alcune questioni di forma le quali erano rimaste in sospenso,
e ci separammo infine promettendo di rivederci fra otto o dieci giorni
per la firma. (...) ³⁶⁾ »

和訳：

「正午に三人の日本人の委員が書記と通訳官を連れて馬に乗って到着した。〔略〕カション氏は来られなかった。しかし日本の通訳官は頭が良く、英語もオランダ語も話していた。そして塩田はフランス語を良く知っていたので、我々は互いに理解し合えたし、我々の条約案と他国の条約を照合するのに必要な全ての文章について話し合うことができた。〔略〕

翌日、我々は条約案の検討を終わらせ、6月25日の通商協定を我々の条約に完全に取り入れることが定められた。そして条約をイタリア語、オランダ語と日本語で執筆すべきことになった。しかし後に、イタリアであまり知られていないオランダ語をフランス語に変えることが決められ、後者がある条項の価値や意味について意義が生じた場合には唯一の正しい文章となることが定められた。条約は、批准の交換ができるだけ早く行われるのを期待しながら、1867年1月1日より実施されるべきことになった。カション氏は都合よく13日の朝やって来て、それまで未解決のままだったいくつかの形式上の問題を決定するのを手伝ってくれた。我々は条約の調印のため8日または10日後に再会することを約束してついに別れた。〔略〕³⁷⁾」

以上の史料から、日伊条約の交渉自体が三日で終わったこと、初日にメ

36) Arminjon、310-311頁。下線は報告者によるもの。

37) 筆者和訳、下線。

ルメがいなかったものの、塩田三郎の協力のおかげで交渉は円滑に行われたことが読み取れる。更に、江戸時代を通じて日本における外交用語として使用されてきたオランダ語がイタリア（だけではなく、西洋全体）においてあまり知られていない言語であったため、条約の交渉は当時世界の外交用語であったフランス語で行われたことも興味深い。というのは、安政5年（1858）の条約の際は、アメリカ、オランダ、イギリスと幕府との交渉はオランダ語で行われ、フランスの場合は日本語で行われたという状況とかなり異なるのである³⁸⁾。

しかも、日伊条約の本文は安政五年の五つの修好通商条約と異なり、日本語／締結国語／オランダ語で作成されたのではなく、日本語／イタリア語（締結国語）／フランス語で作成され、しかも問題が生じた場合に基準となる文章はフランス語と定められたのである。つまり、開国によって様々な西洋国が日本にやってくる過程において諸言語学習に専念した幕府は³⁹⁾、もはやオランダ語にこだわらなくなっていたと言えるし、また条約という生産物に表現される幕府の外交政策が様々な状況に対応できるようになっていたことも窺える。この点について、以下の幕府の史料も言語と外交政策に対する同様の適応性を示している。

38) 拙稿「『安政五カ国条約』を問うて」（注6参照）

39) この点について、アルミニョンはこう述べている。«questo saggio mi dimostrò che i giapponesi conoscono alquanto meglio le nostre lingue d'Europa che noi la loro.» (Arminjon, 297頁) 和訳：「これは、日本人が我々のヨーロッパの言語を、我々が彼らの言語を知っているのより、はるかに知っているということを証明してくれた。」（筆者和訳）。

史料Ⅳ：

「丙寅七月

河内守殿

仏文及訳之儀ニ付申上候書付

柴田日向守

朝比奈甲斐守

今般伊太里国御条約為す取替相成候ニ付て者
彼方において蘭文出来候者無之差支候間御条約
書仏文を以証といたし度旨申立候右者尤之儀
とも被存候間彼方請求通決定仕候就て者支配
向之内仏文出来候者壱兩人ならでハ無之及訳
ニ差支候間横浜表仏学伝習生徒之内兩人右及
訳御用為取扱候様仕度奉存候勿論右者仏公使
よりも伝習生御用□相成可然旨申聞候依之此
段川勝近江守江被□渡可被下候以上

寅七月⁴⁰⁾」

つまり、相手国の言語的な状況に合わせるのは、開国と条約を要求してきた西洋側のイタリアではなく、むしろ開国を余儀なくされた幕府というわけである。西洋の近代的外交が発展していたはずにもかかわらず、言語教育の面では、日本側の方がその適応性が優れていたのではないかと考えられる。

40) 『続通信全覧』第153巻「伊太利条約一件 二」、17-18頁。

VI. おわりに

イタリア使節と幕府との間に結ばれた条約についていくつかの指摘ができる。まず、最初の修好通商条約である安政5年の日米条約や日仏条約の場合と同様に、イタリアに対しても幕府は必ず時間稼ぎという作戦を使用した。つまり、病氣や将軍の不在など、様々な口実によって海外使節の辛抱を試そうとしたのである。

また、安政5年の5つの条約に加え、ポルトガル、スイス、プロシアなどとの間にも条約を結んできた幕府の外交政策は段々効率をあげてきた結果、日伊条約の交渉は素早いペースで進んでいった。その意味では、フランス公使の通訳官だったメルメを動員したイタリア人にとって最も便利な言語であったフランス語を、塩田三郎などを動員して使用した幕府の積極的な適応性は、その外交政策がある程度成熟したということを意味すると言える。以上見てきた日伊条約の交渉は、日仏条約の交渉の際に既に通訳という役割を果たしたメルメは、日伊条約の場合も非常に重要な役割を果たし、宣教師出身だったにもかかわらず、フランスに帰国する直前まで立派な外交官になっていたことを物語っているとも言えよう。

表1 日伊条約交渉の流れ

日付		出来事	出典
和暦 (全て慶応二年丙寅)	洋暦 (全て1866年)		
五月二十四日 (?)	7月6日(?)	網代においてアルミニオンはロッシュと夕食。ロッシュはフランスの援助を約束し、メルメを通訳官として貸す。メルメに書簡が送られる。	Arminjon (以下：伊) 232-233頁／アルミニオン (以下：和) 35-36頁
五月二十六日	7月8日	カシオンは網代に到着してから、アルミニオンに面会し、その依頼を快諾する。イタリア使節の到着とその要求を老中に口頭で伝えるために江戸に赴く。	伊：238／和：41
五月二十七日	7月9日	イタリア使節は網代を出帆し、横浜へ向う。	同上
五月二十八日	7月10日	老中はイタリア使節の到着を知らされる。	伊：295／和：99
五月二十八日	7月10日	イタリア使節横浜で待機。	

五月二十九日	7月11日	メルメは外国奉行・柴田日向守と面会する。	続通信全覧 152 (71-72)
五月二十九日	7月11日	メルメは老中の口頭の回答を持って夜横浜に到着。大坂にいる大君の命令なしには幕府は動けないし、イタリアはその要求をプロシアと同様のものに限定させないと条約交渉は断られると。アルミニオンはイタリア使節が14日に江戸湾に到着する意志を書簡に書き留めてメルメに渡す。アルミニオンはこの書簡をイタリア語で書いてフランス語の訳文を添え、メルメはそれを日本語に訳す。	伊：259～262／ 和：63～66
六月朔日	7月12日	上記の書簡は江戸に送られる。	伊：262／和：66
六月朔日 (受：三日)	7月12日	上記の書簡の内容。横浜に於いて。「以太利国王マゼチテーの全権アルマンジョ」より「日本国帝マゼステーの外国事務執政閣下」宛の書簡（条約を締結するための全権を与えられた。メルメは仲介人の役割を果たしてくれる。日本政府は条約締結に反対しているようだが、再び考えて欲しい。イタリア使節は14日に江戸に到着する予定。イタリア人を他国人と同様に扱って欲しいと。）	続通信全覧 152 (74-75)
六月朔日	7月12日	「意太里亜国王の全権使節アルマンジョ」より「外国事務閣老衆」宛の書簡（上記と同様。）	続通信全覧 152 (76-77)
六月朔日	7月12日	柴田日向守より和春（＝カシオン）宛の書簡（イタリア使節からの書簡を讀け取ったが、病気のため出張できない。その間イタリア人が出府しないようにと。）	続通信全覧 152 (71-72)
六月二日	7月13日	二人の役人と通訳官がイタリア軍艦マジェンタ号に乗船し、イタリア人が日本の武器を網代で購入したという理由で審査する。ただし幕府はアルミニオンの江戸へ赴く決意に対して不満に思う結果とも言える。幕府はメルメに使者を派遣し、イタリア使節の江戸出発を延期して欲しいと。	伊：262-263／ 和：66
六月二日 (受：四日)	7月13日	熱海に於いて。「日本在留仏国全権ミニストル・レオン、ロセス」より「大君之ミニストル御老中各台下」宛の書簡（イタリア使節がロッシュのところに援助を求めにきて、そのためメルメを貸した。イタリアとの条約を最近締結されたプロシアとの条約と同様のものにすれば日本にとって何の差支もない。応じてくれない場合の脅迫。国帝殿下＝将軍が軍旅に出掛けているとの知らせを受け取った。）	続通信全覧 152 (78-80)
六月二日	7月13日	和春より柴田日向守宛の書簡（前回の書簡の内容を受け取るが、イタリア人の出府をやめさせるのが難しい。お大事にと。）	続通信全覧 152 (72-73)
六月二日	7月13日	和春より柴田日向守・朝比奈甲斐守様宛の書簡（イタリア使節は六月三日＝7月14日に当港＝横浜を出帆し翌四日に江戸に着く予定。それに対して、塩田三郎ともう一人の役人を軍艦まで送った方がいいと。）	続通信全覧 152 (73-74)

文化交流における画期と創造

六月二日	7月13日	老中はカシヨンの許に使者を派遣し、江戸入港を数日延期して欲しいと。柴田日向守は老中の命によってマジェンタ号を訪問。	
六月三日	7月14日	マジェンタ号に乗ったイタリア使節は江戸湾に進出。	
六月五日	7月16日	老中は役人を大坂に派遣したのでその回答を待つて欲しいと非公式にカシヨンに通告する。そうしなければ状況は悪化しそうと脅迫。	
六月五日 (受：五日)	7月16日	江戸港に於いて。アルミンジョーより朝比奈甲斐守君・メルメットデカシヨン宛の書簡（早く老中と面会したいのに、大坂からの返答を待つ可との要求を受け取った。明後日フランス公使と共に何うが、その際「使臣館」（＝老中のいる場所？）を訪問できるか。とにかく速やかに幕府の代理人と面会したいと。）	続通信全覧 152 (84-85)
六月五日	7月16日	メルメはフランス語の生徒の「モトベ」をマジェンタ号に連れて来る。武士ではないので商人との面会でしか役に立てない。	伊：271
六月？日	7月？日	「仏国カシヨンより差出候書翰之儀二付申上候書付」。外国奉行の菊池伊予守・柴田日向守・星野備中守・江連加賀守・朝比奈甲斐守・石野筑前守・水野良輔の署名有り。（メルメの引合人としての役割について？）	続通信全覧 152 (86-87)
六月六日 (受？)	7月17日	「仏国公使・申立候大意」。（幕府はイタリアとの条約を断るつもり。フランス公使はイタリアを援助するつもりだし、イギリス公使も同様であろう。……	続通信全覧 152 (87-91)
六月九日	7月20日	イタリア使節は大坂からの回答を待つため横浜に戻る。信任状は未だ老中に提出できず。	伊：273／和：77？78？
六月十一日 (受：十三日)	7月22日	横浜に於いて。「仏蘭西全権ミニストル・レランロセス」より「御老中様」宛の書簡（ロッシュは長崎に赴かなければならないが、留守している間イタリア条約の件がうまく進むように側近のメルメを残すことにした。8月上旬に横浜に帰港するまでのことをメルメに任せる。それまでにイタリアとの条約を締結するようにと。）	続通信全覧 152 (96-97)／伊：273・274／和：98？99？
六月十四日	7月25日	水野和泉守・井上河内守・松平周防守より「伊太里全権使節」宛の、12日付の書簡への回答（将軍は軍旅で大坂に出ているので、条約の交渉は始まることはまだ無理と。）この書簡を外国奉行菊池伊予守がマジェンタ号に渡しに来る。アルミニオンは菊池伊予守に信任状を渡す。	続通信全覧 152 (98-99)／伊：294～296／和：99～102
六月十五日	7月26日	アルミニオンに前日の信任状の受領書とその英訳文が届けられる。	伊：297／和：102
六月十六日	7月27日	菊池伊予守の書付（？）（外国事務執政＝外国奉行宛に出されたイタリア使節の委任状＝信任状の写しとそのフランス語の訳文を受け取った。）	続通信全覧 152 (106)

六月十六日 (受：十七日)	7月27日	和春より「外国方御役人中様」宛の書簡（翌十 続通信全覧 七日にイタリア人士官一人が江戸を見物するた 152（107） めに上陸するので、「護衛掛り御役人」を提供し て欲しいと。）
六月十七日	7月28日	菊池伊予守はメルメに大坂に関する良くない情 伊：297／和：103 報を伝える。大君は長門と戦っている最中なの で諸大名の会議を開くことができず、イタリア 使節はまた待たなければと。
六月？日	7月？日	周防守殿より柴田日向守・朝比奈甲斐守宛の 続通信全覧 「伊太里国仮条約為御取替相成候二付取扱申渡 152（111） 候支配向江儀申上候書付」（役人の一覧表。注 意：「通弁御用頭取」は箱館においてメルメと面 識のあった名村五八郎。）
六月二十日	7月31日	イギリス郵船はヨーロッパにおいて戦争が6月 伊：298／和： 18日に開始したという情報をもたらす。
六月二十五日	8月5日	井上河内守・松平周防守よりイタリア全権宛の 伊：304／和：111 書簡（大君はようやく日伊条約への許可を下り、 柴田日向守と朝比奈甲斐守をその責任者と任命 した。止宿所は三田小山の大中寺に決まったの で、上陸出府して良いと。）
六月二十五日	8月5日	柴田日向守・朝比奈甲斐守より和春宛の書簡 続通信全覧 （イタリアとの条約に引合可能。ただしプロシア 153（8-9） との条約程度しか許されない。しかも条約締結 後、帰帆を急ぐべきと。プロシア条約の蘭文を 差出す（「草稿之俚」）。メルメは報告をする可。）
六月二十六日	8月6日	アルミニオンは上記の書簡を受け取る。 伊：304／和：111
六月二十七日	8月7日	朝比奈甲斐守より和春宛の書簡（朝イタリア使 続通信全覧 節に条約に関する書簡を出したが、「和文のミ」 153（10） であったため、税則の蘭文も送ると。また白耳 義＝ベルギーの条約の和文も差出すと。）
六月二十七日	8月7日	柴田日向守・朝比奈甲斐守より「伊太里全権使 続通信全覧 節エキセルレンシーウエエファルマンジョン」宛 153（11-12） の書簡（イタリア使節は「明日出府」する予定 ということをメルメから聞いたが、「執政同列之 内不快のものも」いるし、「公務繁劇寸隙も無之」 ということなので、面会を断りたいと。）
六月二十七日	8月7日	アルミニオンは、いつ江戸へ赴こうと考えてい 伊：305-306 るか、そして老中の病気のため上陸を延期して 欲しいという柴田日向守と朝比奈甲斐守よりの 書簡を受け取る。
六月二十九日	8月9日	フランス郵船はヨーロッパでの戦争の終戦とオ 伊：306-307 ーストリアの敗北という知らせをもたらす。
七月朔日	8月10日	イタリア使節江戸へ出帆し、午前11時に江戸に 伊：306-307／ 到着。三田小山の大中寺を見学し、幕府の全権 和：113-114 3人に使節の到着と翌日面会したいという要求 を伝える。

文化交渉における画期と創造

七月二日	8月11日	昼に柴田日向守・朝比奈甲斐守と大目付の牛込伊：310-311 / 和：117 忠左衛門は大中寺にやってきて、交渉が開始される。メルメは現れないが、塩田三郎がいるので、交渉をフランス語で行うことができる。会議は16時に終わる。イタリア使節は夕飯をとり にマジェンタ号に戻る。
七月三日	8月12日	朝比奈甲斐守丞・柴田日向守より和春宛の書簡 続通信全覧 (イタリア使節との条約について差支がないし、メルメが周旋することも承知であるとのこと。しかし出府しないのか、それともいつするのかという先日の朝比奈甲斐守よりの書簡と同様に伺いたいと。前の使者の嶋屋に問題があるので新しい使者の七之丞を派遣する。)
七月?日	8月?日	柴田日向守・朝比奈甲斐守より河内守宛「仏文 続通信全覧 及訳之儀ニ付申上候書付」(イタリア使節においてオランダ語ができる者はいないので条約文をフランス語で書く可。そのため、フランス語ができる人を支配向のうち1、2人もいなければ、「横浜表仏学伝習生徒之内」から選んでいいし、「仏公使よりも伝習生御用」を使ってもいい。とにかく川勝近江守(横浜仏語学校校長?)にその旨を伝えと。
七月?日	8月?日	浅野□□守・小笠原筑後守・小栗上野介・朝比 続通信全覧 奈甲斐守・早川能登守・川勝近江守・万年真太郎・牛込忠査衛門(大砲差図役頭取栗本貞次郎・歩兵差図役務方長田銑之助)より河内守宛「語学生徒之内翻訳御用取扱候儀申上候書付」(以上のイタリア条約に関する以上の翻訳の件について、書面の者に伝えるとのこと。)
七月三日	8月12日	条約案の検討が終わる。条約を日本語・イタリア伊：311/和：117 語・フランス語(あまり知られていないオランダ語の代わりに)で書くことが定められる。
七月四日	8月13日	形式上の問題が残されたが、メルメはその手伝伊：311/和：117 いに午前によって来る。交渉は完全に終了し、最終的に調印は8~10日後に行われることが約束される。イタリア使節はマジェンタ号に乗って横浜へ戻る。
七月五日	8月14日	午前9時頃、ロッシュとメルメは座礁したフランス船の救出をイタリア使節に求め、アルミニイオンは快諾する。マジェンタ号は午後3時頃横浜に戻る。イギリス公使パークスも長崎から帰って来る。
七月六日	8月15日	お祭り(聖母マリアの……) 伊：319
七月六日 ~十三日	8月15 ~22日	イタリア使節は条約を写す作業を行う。 伊：319
七月十三日	8月22日	アルミニイオンはマジェンタ号を横浜に残し、大中寺に止宿。

七月？日	8月？日	祭りの日、浅草見物。茶屋で少なくとも5倍の 伊：326 値段を払わされ、その領収書をとっておいて後 にメルメに訳してもらおう。
七月十六日	8月25日	条約調印の日。メルメと日本側の通訳官・学者 伊：331～333 は条約の日本語とフランス語の写しを何時間も 校合する。午後4時に幕府の全権3人とアルミ ニヨンは条約に署名し印鑑を押す。
七月十七日	8月26日	午前10時に、イタリア使節の主な構成員は老中 伊：335 と面会。アルミニヨンは井上河内守と？の前で 礼の言葉を言い、塩田三郎はそれを通訳する。
七月十八日	8月27日	イタリア使節は大中寺を離れて江戸湾へ戻る。ア 伊：337-338 ルミニヨンは中国への出発を9月1日に決める。
七月十九日	8月28日	将軍家茂が死去。アルミニヨンはその出来事を 伊：341 9月末～10月初めに北京にて耳にする。（実際の 将軍の死は翌日の29日だった。）
七月二十一日	8月30日	イギリス郵船はリッサの海戦でのイタリア海軍 伊：339-340 の敗北を伝える。アルミニヨンは老中に書簡を 書き、お礼を述べながら9月1日の出発を報告 する。
七月二十二日	8月31日	午前2時頃、アルミニヨンは老中からの返事を 伊：340-341 もらう。午後1時頃、若年寄立花出雲守種恭、神 奈川奉行早川能登守、柴田日向守、朝比奈甲斐 守、塩田三郎と他の役人はイタリア使節を訪問。
七月二十三日	9月1日	ロッシュとメルメの援助を感謝して、イタリア 伊：341 使節が上海へと出帆する。